

鹿児島県山川港に於ける崖葬*

国 分 直 一

Cliff-burials at Yamagawa Port, Kagoshima Prefecture.

By

Naoichi KOKUBU

In August, 1954, the present writer excavated an ancient burial site at the bottom of the gigantic rock cliff near Fukumoto-cho in the port town of Yamagawa, Kagoshima Prefecture.

In the upper part of a layer about 2 metre thick, human bones of later historic age were found all jumbled up.

Moreover, in the lower part of the layer, fragments of ancient Yuwaibe and Johmon type earthenware were found, no whit of later phase ceramics occurring. And just beneath the spot which contained ancient pottery, a complete structure of human bones of an adult woman with a mirror and trace of a sword was discovered.

It seems to be worthy of particular attention that a burial custom utilizing a cliff or cave has obtained in Ohshima (大島), Ryukyu (琉球), and southern islands lying in the Japan current.

So the cliff burial anciently obtained at the port of Yamagawa is to be considered as a new find linking it naturally with the burial custom in the southern islands.

Referring to more forms of ancient cliff or cave burial, several remarkable evidences have been detected on the Pacific coast ranging from Hiuga (日向) far up to the northeast mountainous tract of Ohu (奥羽) provinces.

According to Dr. Yuwao Ohba (大場盤夫), this ancient form of burial rites was observed in Japan from the later Johmon period down to the early stage of the Old-Tomb (古墳) one.

(一)

薩南の山川港は旧火口壁にとり囲まれて、港湾をなしているが、同港福元町に近接してある石油貯蔵タンク施設地に隣接する大岩崖の半洞窟状を示す崖下には火口壁上層よりの風化土壌による著しい堆土が大小の落盤の間に見られる。戦時中、全上地形の一部は防空壕を作るために開掘されたというが、その後、同部分から道路工事のために更に土砂が採取されたために遺物包含層が露呈するに至った。筆者は昭和27年夏露呈された遺物包含層を発見し、9月21日から3日間発掘を行つたが、当時、遺物包含層はほぼ垂直にその面を露呈せしめていた。Fig. 2

* 水産講習所研究業績 第165号

はその露呈面を整理し、新鮮な面に於ける土壤の層位状況を実測図示せるものである。

発掘には指宿高等学校教官重久十郎氏及び全校郷土研究部生徒諸君の参加をえた。

遺物包含層は火口壁上部から剝落した岩石の点在する大岩壁直下の極めて狭小な部分に於いて見出されたので、掘り抜け得る範囲は辛うじて3m×3m前後に過ぎなかつた。加うるに包含層内部にも落磐と考えられる岩石が包含されているので、発掘は困難であつた。その上に発掘中、上部からの新しい落磐の危険があつた。

このような事情下に間口270cm奥行310cm奥壁の幅ほぼ100cm前後の間を深さ340cm迄掘り下げて遺物の包含状況を調査した。その結果古代及び近代に於ける埋葬例が確認されたので、発掘の経過、埋葬の状況、遺物の包含状況、崖葬の意義等について報告しておきたい。

(二)

発掘経過

既に道路工事による土砂採集のために遺物包含層はほぼ垂直に切り取られた面を示していたために、はじめに何んらの試掘のためのトレンチを掘る必要はなく、直ちに発掘にとりかかることが出来た。発掘は地形に順応して小区割にわけて掘り進める方法をとつた。

第一次の作業

東側岩壁は岩壁の落剝のために深く、鋭角に入りこんだ隅角部が形成されていたので、第一次の発掘は隅角の奥の部分を残してその直前まで、奥行70cm幅270cmの間を10cmづつ、けづつていつた。(図3の第一セクションが第一次発掘の部分)その間の観察について記載したい。

表土面よりほぼ160cm前後にして、黒色砂層に達するが、その間は大体に於いて淡褐色の粘土層となつている。然し淡褐色粘土層のほぼ中位に灰褐色層が一部にあり、灰褐色層に接続して、厚さ僅かに2cmの薄いアカガイの貝層が見られた。

以上の層中、淡褐色層中には表土面から、60cm—70cmの間に鉄屑1片、鉄鋏1、鉄製鋸1、一部に薄く粘薬のかかつた近代陶片(煤煙の跡が附着していた)が出土した。又70cm—80cmの間に鉄鋏3、鉄片1、褐色の粘薬をもつ近代陶片1が得られた。

表土面から110cm—130cmの深さの間に、47cm×65cmの範囲に上腕骨、下肢の上部、骨盤、脊椎骨、肋骨、頭蓋の一部等が砕けた岩片の間に混在して約二体分のものが発見された。この小体積中に岩片と混在して、混乱した状態に於いて見出されたので、ある時期に上方の隅角部から転落したものと考えられたが、第二次の発掘の際、岩壁の隅角の奥の部分から二体分の下肢膝関節以下が発見されるのでその推定が確かめられることになる。

淡褐色層の下方は一部は微細な砂粒層となり、漸次粗い岩屑状の層に変移し、一部は東側岩壁に接して砕けた貝殻を含む黒灰色の粗い砂粒層をはさんで、以下の粗粒岩屑層に移行している。黒灰色の含貝の粗砂粒層は幅、約110cm厚さ、最厚の部分で23cm奥行は40cm前後の小範囲のものである。その下部に接して厚さ5cmの灰層が見られるが、灰層はその下方の粗粒岩屑層中にも二ヶ所見られた。

黒灰色砂粒層中の貝は主として岩礁性の貝であつた(貝の種類については後述する)。この層から彌生式土器片7、縄紋式土器片4、砥石1、軽石製石皿1、鹿角製骨器1が得られた。縄紋式土器片は白色の石英質砂粒と金色の雲母片を含み、中1片は明瞭な市来式口縁形式を示すものであつた。(Plate V Fig. 1 参照)彌生式土器片は無文の小破片であつた。

淡褐色粘土層下は黒色の砂粒層になつてゐるが、粗い粗粒岩屑層に移行している。砂層下約20cm、粗粒岩屑層の中に人骨の膝関節以下の部分が現われた。表土面から180cmの深度を示していた。

第二次の作業

第二次の発掘としては表土下180cm深度に出現した人骨の全貌を調査するために、東側岩壁に沿つて、奥え更に170cmの間を掘り下げた。(Fig. 3の第二セクションが第二次発掘の部分)

第二次発掘に際して東側岩壁隅角部の掘り残してあつた部分の調査をすることが出来た。

表土面から73cm深さに於いて、隅角の奥に二体分の下肢膝関節以下の部分が整然と並べられたような状態で発見された。これによつて、第一次の発掘によつて、より下方に見出された人骨が、岩角隅奥に埋葬された二体の人骨が下肢関節以下を遺してある時期に転落したものであるらしいことが想定されたが、それらが関係を有することは九州大学解剖学教室永井昌文氏によつて確認された。

上述の180cm深度の人骨上体を覆う位置に110cm×120cm×70cmの岩石が斜奥に深く傾斜して埋没していたために、この岩石を除くために破碎を石工に依頼せねばならなかつた。この岩石は埋葬後に上体の部分を覆うようにおかれたものか、埋葬後のある時期に於ける落磐であるかはそのままの状態では不明であつたが、岩石の最も深く陥入した部分の下部に位置している埋葬人骨の頭部が二十余のひびを生じてわれていることから見て、落下の際の圧力のために生じたものでないかとする想定に導かれる。

この岩石の上部には人為的の遺物は全く見られなかつたが、岩石下の淡褐色層中には62cm×20cmの範囲に獣骨(焼かれた痕跡を示す)と人骨の頭蓋の小破片が見出された。然して頭蓋の破片は上述の岩壁隅角部埋葬の人骨の転落の際の破片と考えられたから、180cm深度に於ける埋葬人骨の上体を覆う岩石は比較的近代の落下によるものと推定することが出来た。

以上の岩石下の淡褐色粘土層の最下底に於いて、祝部式土器片が得られた。尙その直下の黒色砂層から、雲母片を含む三片の縄紋土器片(無文)と人骨(脛骨)の小破片二片が発見された。その直下に第一セクション発掘の際膝部以下に見出された人骨の上体全貌があらわれた。東側岩壁に平行して頭位を南西にし、足位を北東にし、仰臥伸展の形式で埋葬されたものと思われた。九大金剛丈夫教授は女性にして、三十代未かと判定された。人骨の保存の状況は良好であつたが左手の部分は腐蝕のために失われていた。左下腕と上体との間には赤褐色の泥土塊の小塊が見出されたが、その中に、白銅製の鏡と、その上に劔鞘の足金物と考えられる鉄具と辛うじて残存する劔身の極めて小部分が見出された。(Plate V Fig. 3 Plate VI Fig. 2, 3

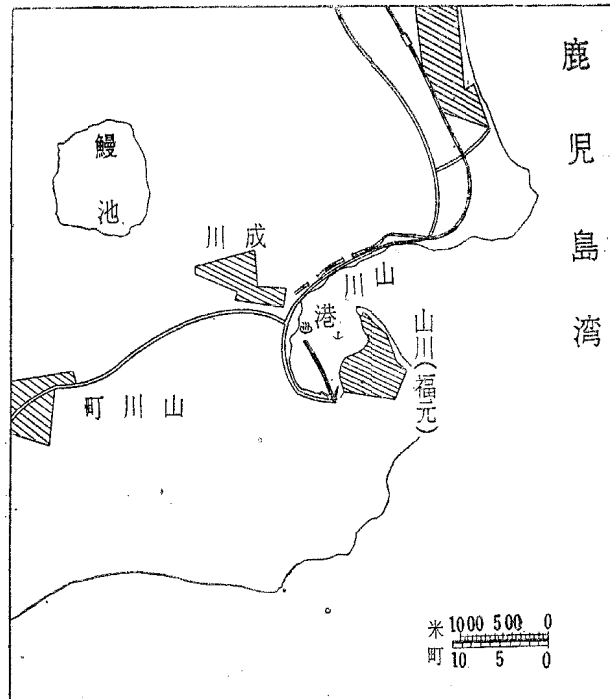


Fig. 1. Showing The burial place at the port of yamagawa, Kagoshima Pref.

参照) 白銅製鏡も腐蝕のために半以上失われていた。鏡は寺師見国氏によると瑞花双鸞八稜鏡と考えられるとのことである。氏の近著「鹿児島県古鏡」に紹介されている。副葬されていた標品に酷似したものは種子島農事試験場内に於いて出土している。

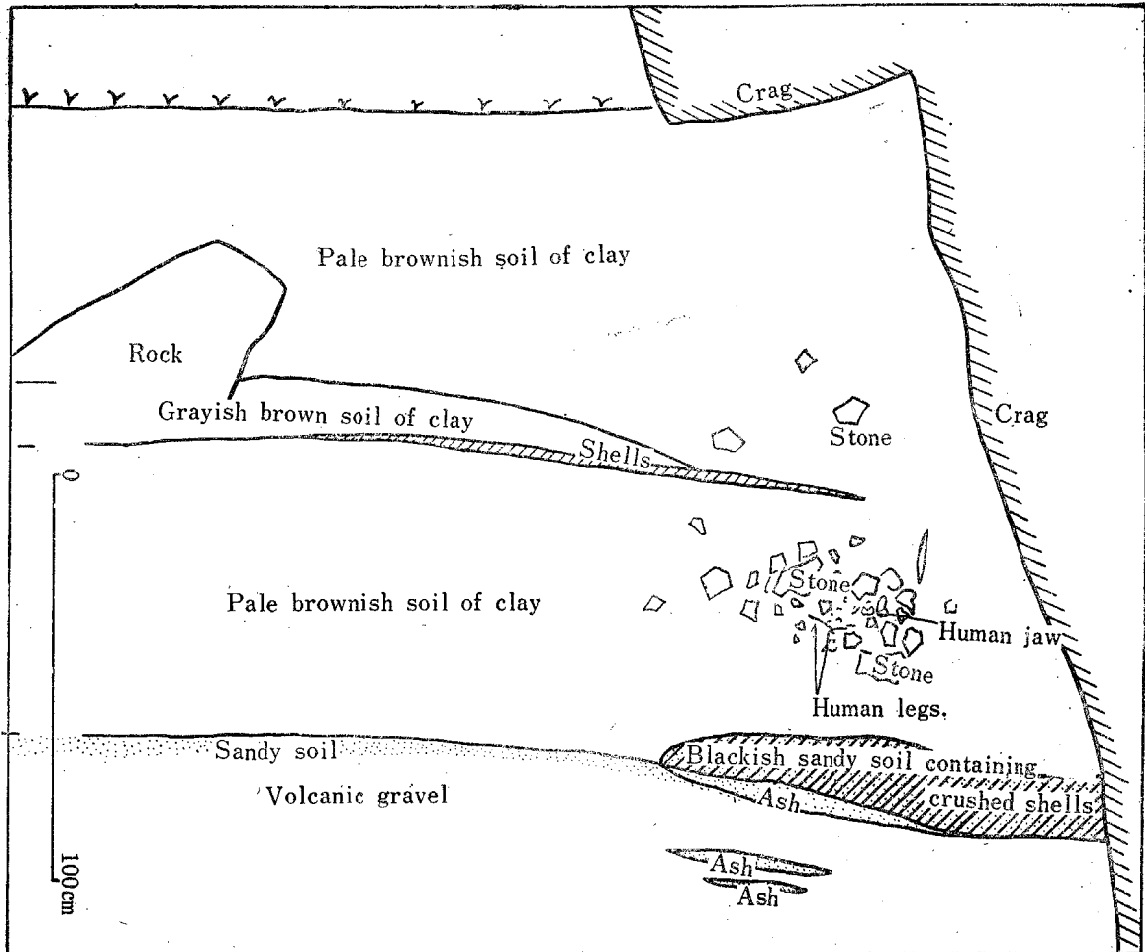


Fig. 2. Showing stratal condition at the section exposed by the road construction.

伸展葬下 63cm 深度に 8 cm 厚さの灰層があり、その灰層中から焼けた獣骨 4 片と未焼の獣骨 1 片とが得られた。発掘は表土面から下層 340cm に至る迄続行した。粗い岩屑は次第に微細になり、海辺に見られる微細砂粒と全く同様の状態のものに移行していた。遺物は伸展葬下 63cm の灰層中に見られた獣骨を除いては他に見出されなかつた。

第一次発掘の際、人骨下肢部出現の -180cm 迄掘り下げてあつた部分も同時に同じレベル迄掘り下げたが、その部分からは何んらの遺物も発見されなかつた。

発掘中、トレンチ上の岩崖から落石の危険があるため、より以上の発掘は困難であるので中止した。

第三次の作業

第三次の発掘は伸展葬人骨の頭位から、約 100cm の間を第二次と同様 -340cm 迄発掘したが表土下 80cm にアカガイの薄い貝層が見られた以外には一切の自然及び人工遺物は発見され

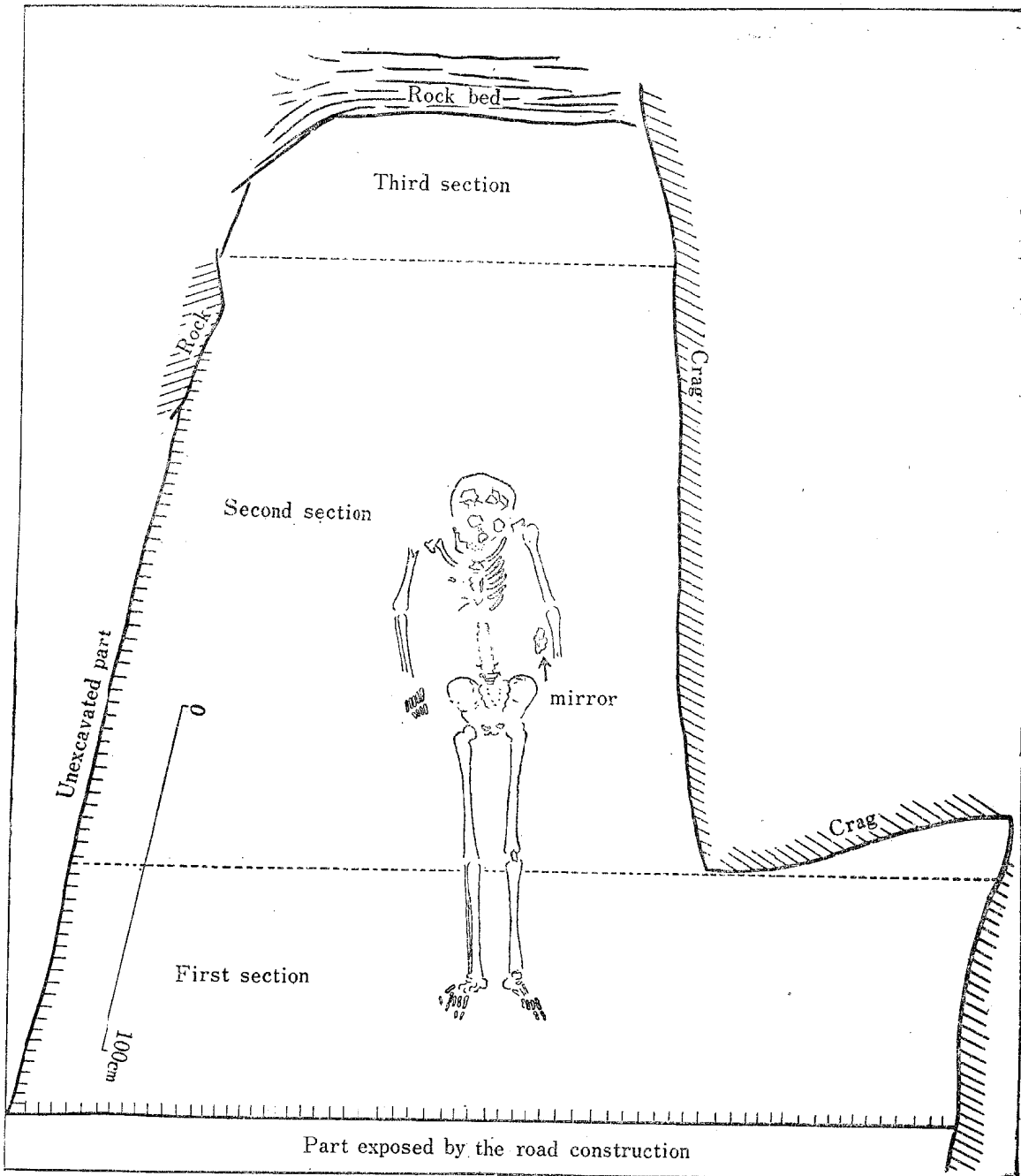


Fig. 3. Showing horizontal sections, at a depth of 180cm, of the excavated trenches and position of a buried skeleton.

Pay heed to the metal fitting and trace of a sword discernible on the mirror.

なかつた。尙第三次のトレンチの奥は岩盤になつていて、その上に薄い表土層があるに過ぎず遺物も発見されなかつた。

以上に於いて記載してきた遺物を層位的に表示し、尙貝層及び散在せる貝について品種を表示する。

遺物包含状況の層位別表示 Showing stratal condition around contained remains.

発掘層位	包含遺物 (第一次セクション)	包含遺物 (第二次セクション)	土 質
cm			
0—10			
10—20			
20—30			
30—40			
40—50			
50—60			
60—70	鉄屑, 鉄製鏝, 近代陶片	下肢膝関節以下 (2体分)	淡褐色粘土
70—80	鉄鏝, 鉄片, 近代陶片		淡褐色粘土
80—90			
90—100			
100—110			
110—120	人骨 (骨盤, 肋骨, 脊椎骨, 上腕骨)		淡褐色粘土 但人骨は岩片と混在
120—130	人骨 (肋骨, 頭蓋, 顎骨, 下肢上部, 脊椎骨)	獣骨 (焼けたあとあり) 人骨 (頭蓋破片)	第一次セクションの骨は岩片と混在。第二次セクションの骨は淡褐色粘土中。
130—140			
140—150	骨器 (鹿角製品)		黒灰色含貝層
150—160	縄紋土器片, 彌生式土器片, 砥石, 石皿 (軽石製)	祝部土器片	第一次セクションの遺物は黒灰色含貝層 第二次セクションの祝部土器片は粘土質下底。
160—170	縄紋土器片	縄紋土器片, 人骨 (脛骨破片)	第一次セクションの遺物は黒灰色含貝層 第二次セクションの人骨, 縄紋土器片は砂層上。
170—180	埋葬人骨 (下肢下半部出現, 第二次セクションに於いて全身出現)	埋葬人骨, 白銅鏡, 刀身, 鞘金具	粗い砂利層。
180—190			
190—200			
200—210			
210—220			
220—230			
230—240			
240—250		獣骨片 (焼骨及未焼骨を含む)	灰層
250—260			
260—270			
270—280			
280—290			
290—300			
300—310			
310—320			
320—330			
330—340			

包含された貝類 The list of Shells.

層位	貝の種類	包含状況
cm 70—80	<i>Patinopocecten tokyoensis</i> (TOKUNAGA) トウキョウホタテ. <i>Anadara broughtonii</i> (SCHRENCK) アカガイ.	僅に散在
cm 83—84	<i>Anadara broughtonii</i> (SCHRENCK).	貝層
cm 130—140	<i>Cellana nigrolineata</i> (REEVE) ウシノツメ. <i>Tegula nigerrima</i> (GMELIN) ヒメクボガイ. <i>Barbatia obtusoides</i> (NYST) カリガネエガイ. <i>Septifer bilocularis</i> (LINNÉ) クジャクガイ. <i>Soletellina olivacea</i> (JAY) イソシジミ.	散在
cm 143—173	<i>Cellana nigrolineata</i> (REEVE), <i>Nerita albicella</i> (LINNÉ) アマオブネ. <i>Chama reflexa</i> (REEVE) キクザル. <i>Barbatia obtusoides</i> , <i>Spondylus cruentus</i> Lishke (チリボタン). <i>Anomia lischkei</i> Dautzenberg et Fischer ナミマカシワ. <i>Haliotis gigantea</i> (GME0IN) マダカ. <i>Tegula nigerrima</i> (GMELIN). <i>Mondonta labio</i> (LINNÉ). イシダタミ. <i>Batillaria multiformis</i> (LISCHKE) ウミニナ. <i>Pisania ferrea</i> (REEVE) イソエナ. <i>Pupura echinata</i> (BLAINVILLE) ウレイシ. <i>Serpulorbis imbricata</i> (DUNKER) オオヘビガイ. <i>Soletellina olivacea</i> (JAY). <i>Venerupis japonica</i> (DESHAYES) アサリ. <i>Septifer bilocularis</i> (LINNÉ).	黒灰色砂質土壌を含む貝層(魚骨4片と他に文化遺物包含)

上表にあげた貝類は何れも自然の状態のものでなく、遺棄されたものであろうと考えられる。然して上述の発掘経過中に述べてきたが、包含層中、所々に灰層があり、その中から焼けた獣骨が見出されたことより判断すると、恐らくかなり早い先史時代以来この半洞窟状の崖陰を利用したのあることも推定される。黒灰色層から砥石や鹿角製品が発見されていることも注意すべきであろう。然し居住に耐えられる所でないから、居住されたとは考え難いと思う。この沿岸で雨風を避けうる唯一の地形をなしているのので、一時的に利用されることはあつたものと考えられる。山川港沿岸に於いても険阻な地形をなしているのので葬地として利用されていたわけでもあろう。

文化遺物によるに、上述した如く、縄紋式土器(後期)彌生式土器、祝部式土器から近代陶片にまでわたつて発見されることよりすると、少くとも縄紋式後期以来近代に至る迄、この山川港沿岸の住民が何んらかの意味に於いてこの岩崖地区に関係をもつていたことを語つていゝとすることが出来よう。

この地形利用の中最も注目すべきは古墳期及び近代に於いて行われたと考えられる埋葬である。

崖陰利用の埋葬習俗が文化系統に於いて如何なる意義を有するものであるかは極めて興味深い問題であると思ふものである。

(三)

以上によつて山川港の大岩崖下の遺跡が埋葬遺跡であつたことは明らかになつたと思うが、かかる埋葬形式が民族学的には如何なる意義をもつものであるかについて考える所をあげておきたい。

台湾大学の凌純声教授は洞窟、半洞窟を問わず、崖壁、崖陰をも含めて「崖葬」とよび、中国及び東南亜細亜に於ける崖葬の分布を取扱つた優れた論文を書いておられる。¹⁾

私は崖葬は風葬の一種であり、風葬の場合に最も普通に洞窟や崖壁、崖陰が利用されたものと考えている。洞窟葬の場合に、洞窟内の推積土を掘つて埋める場合があるが、この形式は本来的には曝葬であつたものが変移して現われてくると考えるものである。山川港の場合は後者である。

大場盤雄博士が「本邦上代の洞窟遺跡」(昭和9年)を書かれた時には53例の遺跡を掲げられている。²⁾ 大場博士の報告によると南島から東北地方に及んで見出されている。太平洋岸に多く見出されるが、日本海側にも見出されている。大体に於いて海岸地方が多いが、東北地方の如く比較的海岸に近い山間丘陵の洞窟に見出されている場合がある。但し東北に於いては遺物の中に貝輪或は貝製装飾品を伴うものの多いことから海岸居住者の系統の遺跡であることが推定される。ただ中部地方では海岸から比較的遠い山地に見出される場合がある。

その年代は土器を主として推定すると大体石器時代から原史時代に亘つて行われたことが明らかにされている。然して土器の型式からいうと『一部に縄紋式土器の中期と考えられる厚手式土器の存在があるがその殆んどが末期に属するものであり、更に彌生式土器及び以降の土器を伴出する点からその多くが石器時代末期より原史時代に降るものが主を占めて居ると推定することが出来よう』と大場博士はいわれている。

その性質を考えるに多数の人骨の存在する例が多く、中には埋葬の様式を明らかに示している例も少なからずあることから、居住的意義を有する場合よりも葬所としての意義を有することの方が強く考えられる場合が多いのである。

生活用具が見出されたとしても、それによつて生活がなされていたと考えることは必ずしも妥当ではないと思う。副葬の思想が発達する前には死者の私物を遺棄することがあつたと思う。

山川の場合は明瞭に墓所としての意義を有する例であるが、墓所としての洞窟或いは岩陰の利用が本土の他の地域では原始時代に於いて終末が来ているのに、山川の場合は古代から近代に及んで見出された点に新しい特色を示している。

崖葬は南九州では山川例の他に桜島に於いて1例発見されている。洞奥に人骨を有する例で、古墳期のものであろうと河口貞徳氏から御教示を受けた。習俗として海辺居住者の一部によつて行われたものであろうことが推定される。

以上の鹿児島県発見例は古墳期のものであるが、明に先史時代に行われた例は日向で発見されている。日向例は鳥居博士の報告にかかるものである。³⁾ それは延岡市の南、愛宕山々麓に発見されたものである。

「窟口の高さ8尺1寸、奥行6尺1寸、その中間で幅7尺、天井は中央で高さ6尺5寸、洞窟内には海産貝、哺乳動物の鹿骨の破碎した骨片や魚類の骨片等があり、更にこれに石器や縄紋土器片が混在、泥砂層の中に組合石棺として、層の上部に於いて三ヶ所存在することを発見した」と鳥居博士は記載されている。

以上に於いて見られるように、博士は埋葬石棺は組合石棺と記載されながら、尙『実は正しく石が組合されて棺を形成して居らず、僅かに石を集めて来て棺形を呈しているに過ぎない。棺を作つて居る石はいづれも一列べて棺側に石を積んで壁とせず高さは僅か5寸から1尺許りで、棺の形状は稍長方形を呈し、方位は岩窟の方位と同じ南北に面して居るものが多い』と述べられている。そして何れも頭位中に石棺様のものがあり、屈葬していたと記載されている。尙興味深いことは、各々稍長い石を頭側に一つ立て居たとし、まさしくメンヒルであるといっている。尙上記の3例の下に構造に於いて同一の2個の構造が発見され、棺内に人骨断片が得られたという。博士はこの岩窟内墳墓に於ける埋葬人は *Urbewohner* として縄紋土器製作使用者であることを述べ、徳島市の小丘麓に於いて発見された遺跡と比較すべきであるとして、貝塚の存在状態や遺物もまた類似していることを注意している。然し徳島の場合は入口にドルメン様の構築物があり、彌生式土器は主としてこの特殊施設の附近から発見され、縄紋土器(薄手)は洞奥から発見されるという。

以上の諸例から見ても一部海辺古代住民によつて崖葬が先史時代以来習俗的に見られたことは確かなことと思われる。然して山川例は古代に於いてのみならず比較的近代にも行われたことを語っている。然しながら崖葬は南島に於いてはより近年まで行われていた。この習俗は南海のインドネシアの居住する島嶼には現在でも行われている例がある。琉球列島に最も近い台湾紅頭嶼に於いては現在でも、ヤユ社人の間に崖葬が行われている⁴⁾ 台湾東海岸に於いても一部原住民の間に崖葬例、風葬例が近代迄見出された。

黒潮水域に於けるかかる崖葬例を考えると、私は古代日本に於ける海辺住民或は海辺系住民の一部によつて営まれていたと考えられる崖葬は南方の崖葬習俗と関連をもつものであることを想定せざるをえないと思つている。

興味深いことは先史時代崖葬人骨中抜歯を行う例が見られることである。安房国神戸村安房神社境内の例は最も著名である。小金井博士の調査によると約20余の骨格中15例の成人骨には全部抜歯の風が認められているというのである。土器は完形品1個、破片28、前者は小形埴で土師器に属し、後者26片は同質の無紋素焼土器で他2片は縄紋式土器という。尙夥しい貝輪を伴つていたという。⁵⁾

三宅宗悦博士によつて徳之島の崖葬人骨に抜歯例が発見されていること⁶⁾ と思ひ合せて、抜歯習俗と崖葬との結びつきを示す安房神社例に深い興味をもたざるを得ない。

私は抜歯も崖葬も南海黒潮水域に於ける一連の関係を示す南方系習俗だと見ている。

私は魏志倭人伝に登場する入墨習俗なども、東南アジア系のもので、恐らくは先史時代に於ける抜歯習俗などとの関連に於いて考へて見る必要があるのではないかと思つている。

註

- 1) 凌 純声 中国與東南亞之崖葬文化 国立中央研究院歴史語言研究所集刊 第25本。
- 2) 大場盤雄 本邦上代の洞穴遺跡 史前学雑誌 6 (3)。
- 3) 鳥居龍藏 上代の日向延岡 附録 愛宕山麓岩窟内墳墓。
- 4) 筆者著 Note on the Burial Customs in the Botel Tobago Island. 台湾文化 5 (1)
- 5) 大場盤雄 前掲報告。
- 6) 三宅宗悦 大隅国徳之島喜念原始墓出土具製品及出土人骨の抜歯 考古学雑誌 33 (10)。

以上の記載中貝類の同定については鹿児島市立博物館々長永井亀彦先生をわづらわしたこと及び発掘にあたっては山川町当局から多大の便宜を与えられたことについて明記して厚く感謝の意を表したい。

追 記

崖葬の発見された地区は大岩崖が海に迫っているため、往時は交通の困難な場所であつたと考えられる。山川港の北岸地帯と現在市街をなしている福元町地区との連絡は往時に於いて船で連絡されていたという。（現在は陸行と舟行によつて連絡されている）現在の沿岸道路は比較的近代に於いて、埋土を行い建設されたもので、それ以前は辛うじて岩崖下汀線を通ることが出来たと語つてくれた町民があつたことは興味深いことである。従つて、崖葬地は往時に於いて山川港沿岸に於ける最も辺地をなしていたわけで、まさに崖葬地として好適な地形と地理的位置をなしていたといえるようである。

PLATE

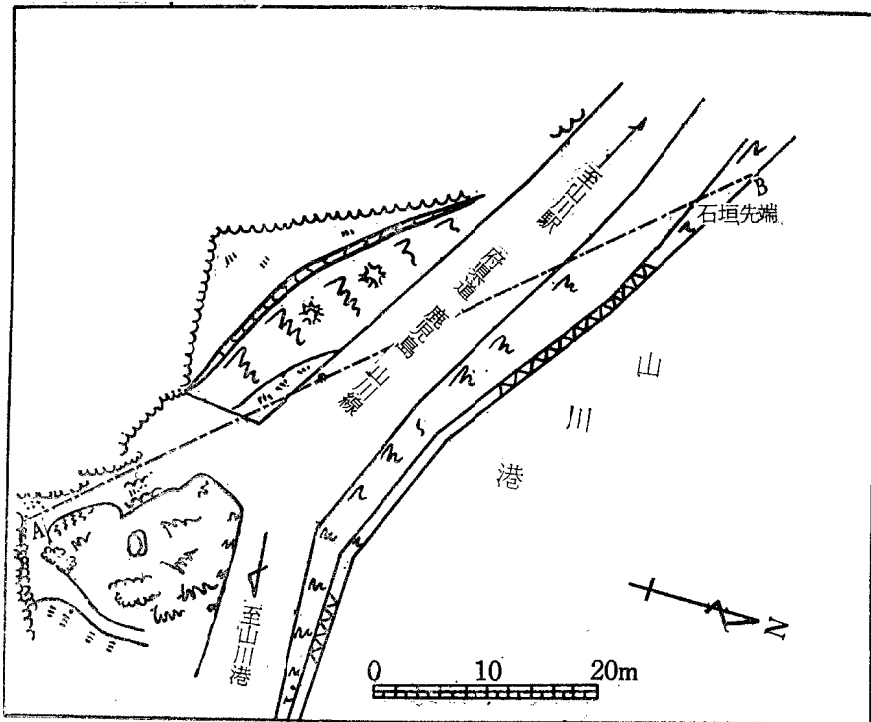


2

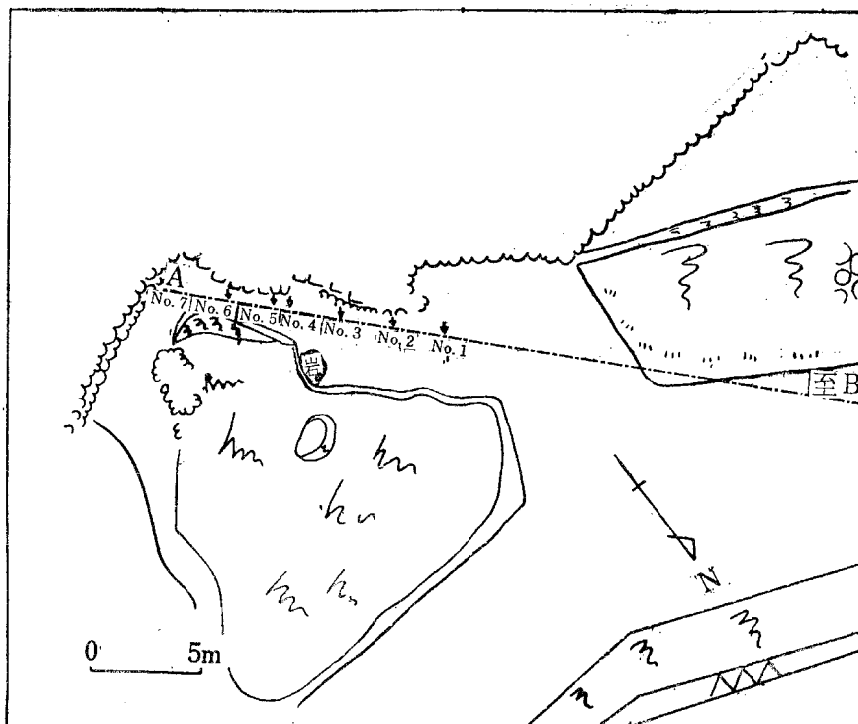
- (1) Burial place at the bottom of the gigantic rock cliff at Yemagawa Pprt.
- (2) View of the site. The huge (180cm (height) x 70cm x 200cm) block was removed. A spatula (No. 2) marking the reach of the dead body's feet buried at a depth of 80cm.



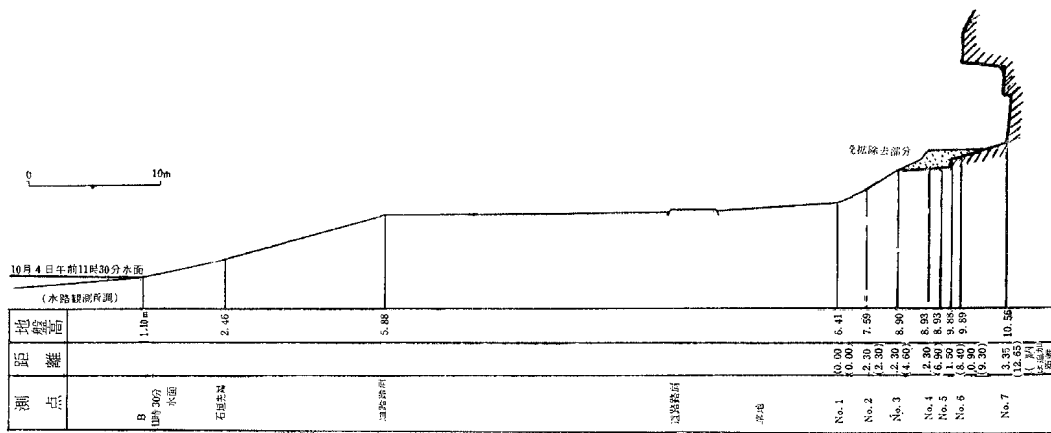
1



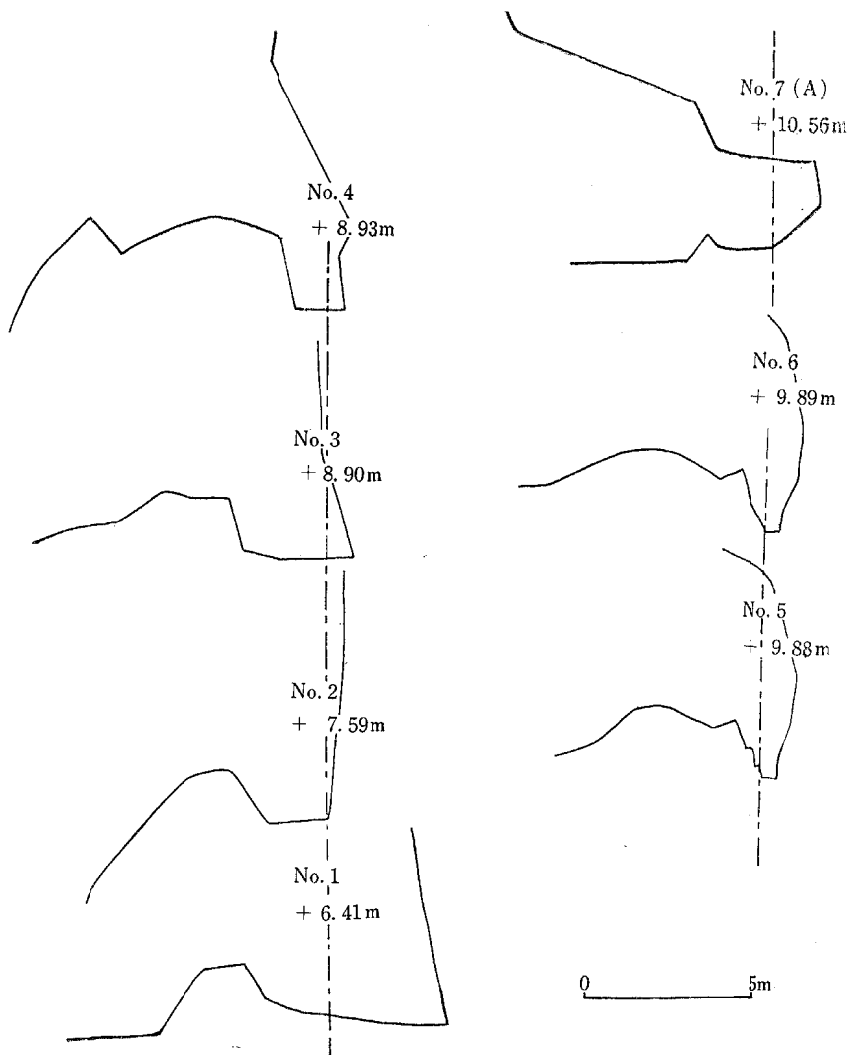
Map of the place where excavation took place.



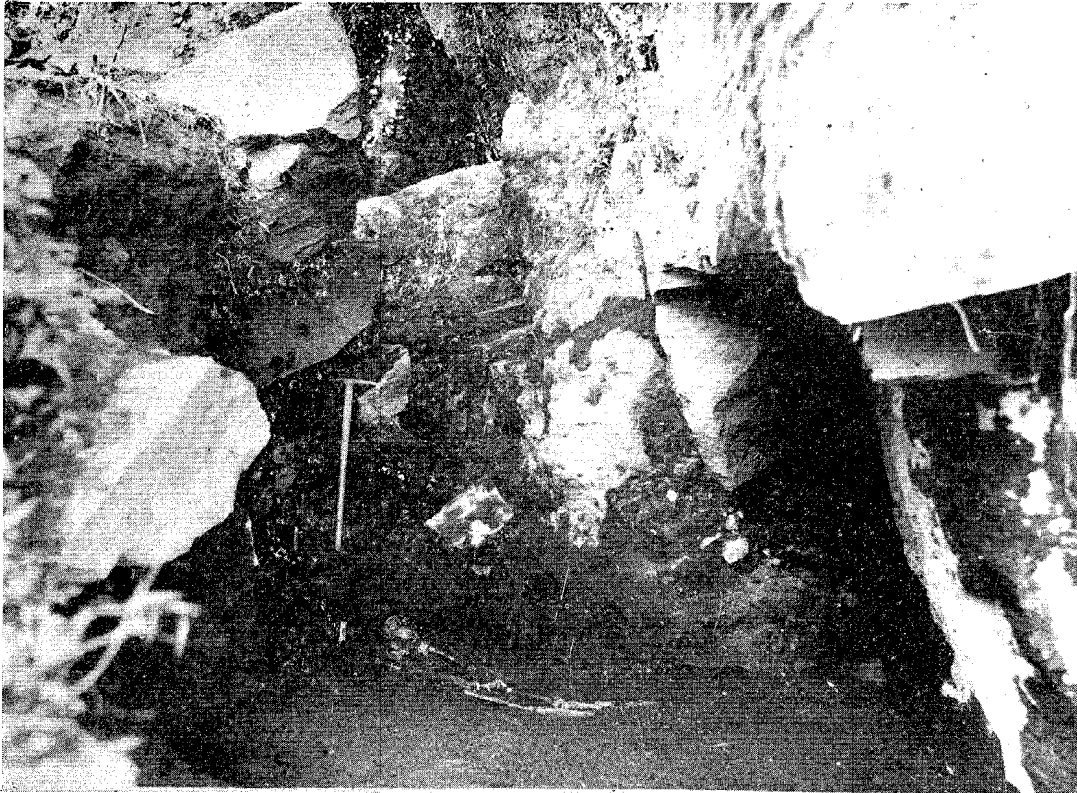
Enlarged map of the place where the excavation took place. Locations, No. 1—7, indicate the points that cross sectional charts were made.



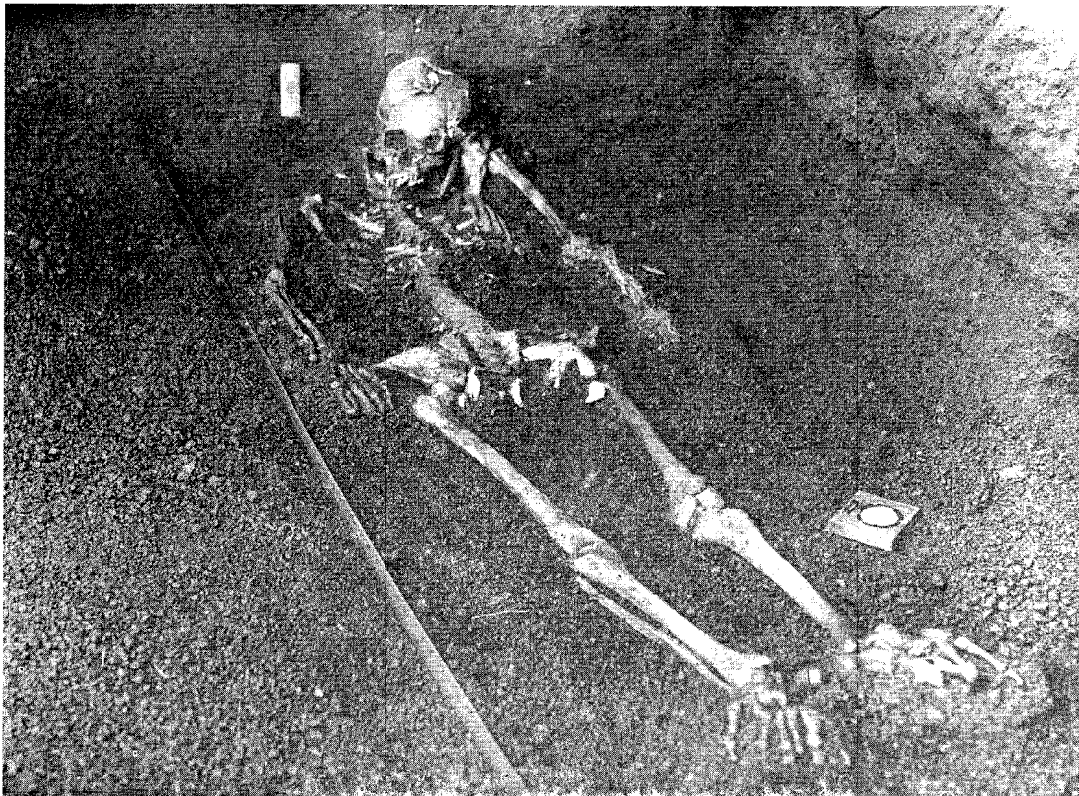
Vertical section between A and B indicated on the map in Plate 1. Section at points No. 4—5 indicates the location where a complete skeleton was found.



Cross sections at points No. 1—7 indicated on the map in Plate III, 1,

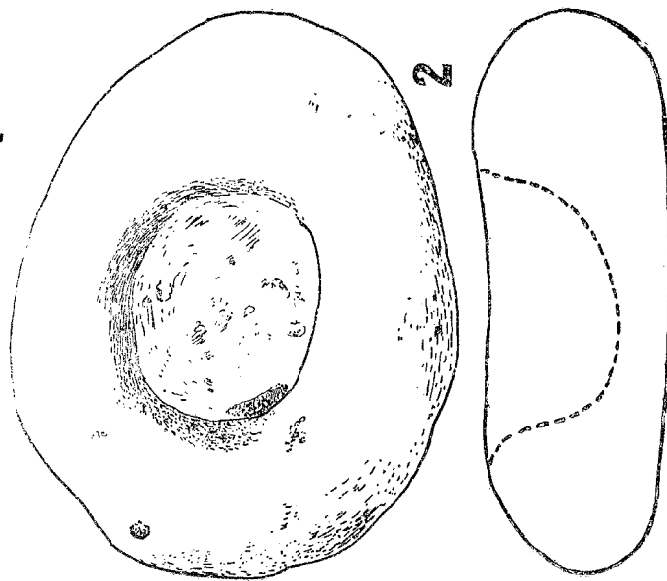
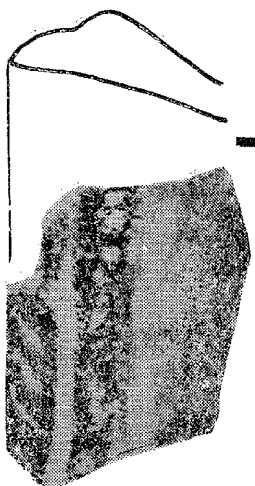
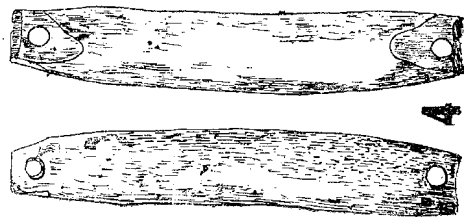
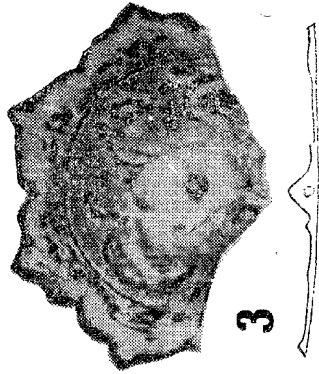
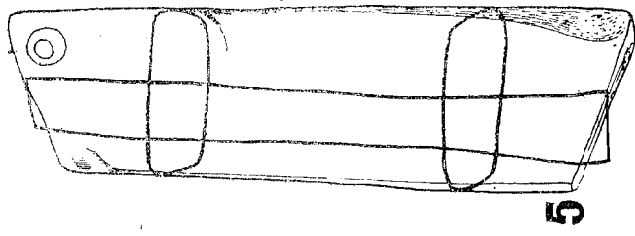


1

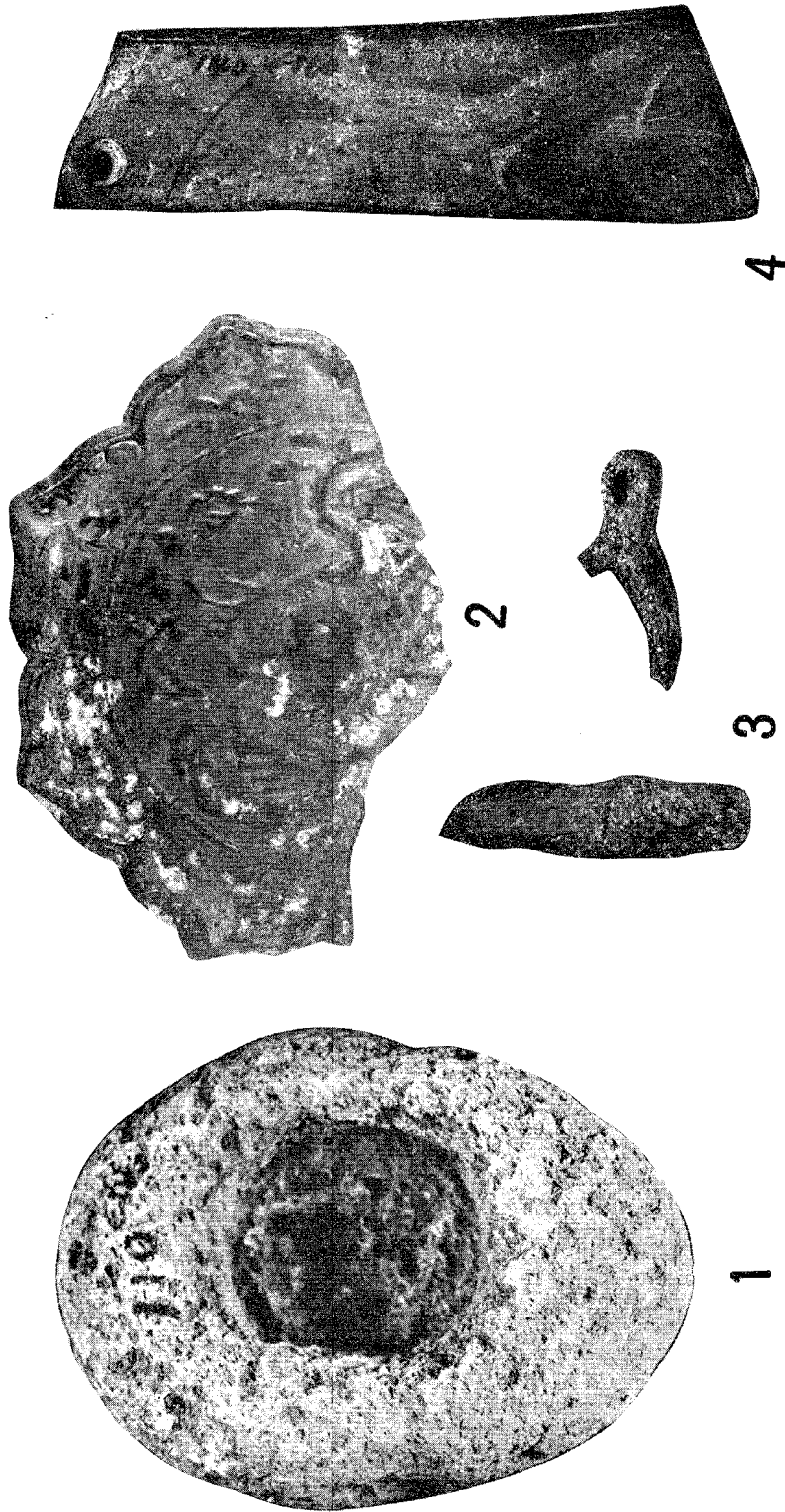


2

1. Showing the view of the burial place and the skeleton found at a depth of 180cm,
2. Closer view of the skeleton



Remains dug up at the lower part of the burial place.
(1) A fragment of the Ichiki type pottery. (2) A punic stone vessel.
(3) A mirror. (4) A bone implement. (5) A grindstone.
See the list referring to the stratal location of the specimens.



Remains dug up at the lower part of the burial place.

- (1) A punic stone vessel, 11.6cm long.
- (2) A mirror, 6.8cm in diameter, found between the buried body and the left arm.
- (3) A fragment of a sword, 3.7cm long, and a metal fitting, 2.9cm long, found between the buried body and the left arm.
- (4) A grindstone, 12.8cm long.